水無瀬之平合

[illegible]藏書

[illegible]文庫

題

春戀　夏戀　秋戀

冬戀　曉戀　暮戀

羇中戀　山家戀　夜ゝ戀

旅泊戀　関路戀　海邊戀

河邊戀　寄雨戀　寄風戀

作者

左馬頭藤原親定

前大僧正

俊成卿女

左大臣

權中納言公継

宮内卿

大藏卿藤原朝臣有家

上総介藤原朝臣家隆

左近衛權中將藤原朝臣定家

右近衛權少將藤原朝臣雅經

讀師

講師　定家朝臣

判者　皇太后宮大夫入道釋阿

當座付勝負追書判詞

水无瀬殿哥合

一番　春戀

左　勝　　左大臣

うくひすもなくかまる涙こけれまさるは我袖むもかれしけに

右　　俊成卿女

おもかけのかすめる月そやとりける春やむかしの袖の涙に

左乃哥ハ宮ゑゝらる春ハ隣よりゝ鶯乃ゑせい

つゝ哥をとり右ハ月やのゐ春やむかしの

心なるかこそま艶ふかくこえ侍をたゝ

ゝ袖のしほかれしはいとゝ哀てまさるへし

色見え侍は右為勝

二番

左　勝　　親定

月おほろやしほの山のむ衣ともしく若きなみたしけゝ

右　　宮内卿

さてもまたうきむやそれ□しへとくそれをおもひそめまつはて

ほ右乃こゝそまてみてとけりおもしく侍もう

すそもつゝしむ末乃句やかくそいかれて

もきこえすや侍る左ハいれ山乃かすみ

衣をみてとゝのはしもおもしくみてゝ侍り

も勝ぬへくや侍る

三番

左　持　有家朝臣

萩にふく風のなれしも恨みてそ秋てふ暮れてそゆく

右　雅経

人しれすなくさめてしも秋はまことに夜すから袖乃秋風

左哀ある夕暮志かれてそなといふ詞よせありて
見え侍り右人かはれるおもかけ乃いはまことにへ
又哥の心と夜すからに引寄てみえておかし
袖乃秋風といへる左ハよせおほく右ハこえん
よみて侍りぬすまつて持なるへし

四番

左　勝　定家朝臣

長きや花にさはらぬ春霞それてうつりみえし夕かれ

右　家隆朝臣

うみてらん浦秋おほしいかうつる花に春乃夕暮

され哥ハそれてうつりみえし夕かれ右の哥ハ
うつる花に春の夕暮とうちあかこそも
よろしく侍るを勝負は書ハ河乃威儀に
てや侍合にや侍らし左勝と申侍るら

ま侍しなるべし

五番

左　勝　前大僧正

迷とせそおもふかたしかはよそにみし花の梢に勝月衣か

右　権中納言

思ふやまみかはいとゝ遠き梢て人気ありけるのとかにそ思ふらん

左みゆるの雨しかはよそにみしと思て花の梢に
猶の月衣いつの情はかなしく見えて侍り
右おもしろきやとこそて来よ何とせんとはいつも
のまゝみやけ人をもすまれ侍しかは左勝

よろしくや侍り

六番　夏恋

左　勝　親定

さてもわれ岩ゐるゝ清水のおもやせてやゝもしられ袖の夕暮

右　俊成卿女

たちかへりや夏も秋をさそ夜風秋に秋見えたり
秋見えたりの思ひを見えといつも侍りける
はおもひ侍りやなれはこそいつまとそこあ
やゝもしられ袖の夕暮といへるあやゝあるたり
のあはれといへるしかるにはをかしく侍るを

以左為勝

七番

左　宣胤卿

あけぬよのおもひしらるゝ夜半の我枕とやかゝるおもへき

右　勝　貞敦親王

思ひねのまくらくや五月のやみに雲ふかきそのかたやまつらん

左ハ身にはまるといふハ左ハ思ひねまくらといふ
かなもそれに侍るへきにやあなかち待たハこと
またほしからさや久しくおもへことといふハ右ハこゝろによる
てれこそや山郭公といふ文字なくきこゆま

勝るにや侍る歟

八番

左　持　権中納言

ちる花をそや軒の梅のかをりならてひとり語と思ひてやいん

右　雅綱

きくも人まつ山にかゝる我もおもひつけれはさ夜の一声

左ハ言葉ハ心に侍るに姿ハ優に侍ると右の
なる姿に貴くしてそいつれもあまりなる
やうみ侍る末の句にてハ心ありてなしかもさて
侍しやうにみえ侍へく持とそ申し

九番

左　勝　左大臣

草ふかき夏野分行袖の上にほしてそ○露そこほるゝ

右　家隆朝臣

時そともや衣ハ蛍をとふらむこゝへし人乃下ぬれなるいを

左歌こそて霧払ふ文字におかしくこそ

侍る右歌こそ一人のしたにいへとも

なまし宜ハ歌を身のたしなみの字なか

貴歌にハ待て○て歌合にハ負なるへし

さまもつやうに待るうつる也左の勝にて

侍る○露そこかくて左勝とそへきや侍らん

十番

左　持　前大僧正

蓬生にふかき○そての夜な夜なとなれぬ露の玉かな

右　定家朝臣

郭公さてもよはにきゝてそ鳴やさ月の空や今の時

左歌てなれハ露の玉かな又おかしく見え

え歌大かたよはにて鳴ていてもやさ月の

まてよる字つゞけ歌にや続けなるとも

やゝ歌つゞけも中々歌様ハ持に待申し

十一番　秋戀

左　　　親定

らしやさは見えぬ宿の庭よりむかつ松にふかきそ秋の夕風

右　勝　　前大僧正

野への露は色もなくてやこほれつる袖より過る荻の上風

左歌らしやさえにいつくしまつりふつけそ
秋の夕風の詞まことにおかしくは見えて侍る
右文字もなくてやといへる袖より過る荻のと
風はいとしもおかしく侍るを勝負申へからし
侍るやうや左をとるへしとは猶侍らすらん

右乃勝へきにや侍らんなとしらん色なとさ
らうしや侍る哉

十二番

左　　　権中納言

我心いつをはへてわすれぬる秋風おとしには出し身の物と

右　勝　　定家朝臣

こ秋しも月やあらぬ大空の秋はさらにいはしとくゝそ侍らさ

両首ともに秋のあはれいはむにへきらんはおかしき
とたは清輕の秋興賤乃心にそこはかとなき
しきゆゑといひてなやなをすくらんとさし侍るや

右ハ秋のよるやうかりやとせし御らハ左の露に
かりうつりまし左方識よろしくこそ
負侍りけり

十三番

左　持　俊成卿女

なれきつる雲ゐの露の涙こそ袖の秋にはわすれさりけれ

右　雅経

みなれにしやとりなれし秋の月影も袖かはらぬころ

左歌雲井の露の涙こそといへる情ふかく侍る
右歌又露のかはりを袖にうつきにいつまて
の句もなにはおかしく侍れハ持とすへきにや

十四番

左　左大臣

せく袖に涙の露やあまるらんみたれしられし宿の萩の上の露

右　勝　定家朝臣

物おもふとてそ身ハ大方の秋のそらうらめしく秋の雑と
両首情深く侍るにおかしく侍るをこゝろえて表徳
へき旨御さたハ左せく袖にと侍るやまるに萩の
との露をも侍るに志るしてかすやと申侍りや
右ハ身を大方の露にうらみよりもそへつゝまちて

わきて秋乃様をとふる事やゆるんとて勝よ為

うけ給しなや侍る歟

十五番

左　　　　宮内卿

物おもふ袖ハいつとも露けきを大かたの秋ぞ悲しき

右　　勝　　家隆卿

おもひ入力ハ深きに秋の露ぞ見えけるや吉ける也

左歌情深く哀なるしくハ侍るを右ハ力の有ける

秋のあはれをこふる見えて末や末枝乃風にハ

及ん事やゆるんとて勝とさり侍らへし

十六番　冬恋

左　　　　左大臣

わかれてもさらに翅よとむ霜乃消えもてゆくとやなる

右　　勝　　雅経

霜ハさやかなる中ながれてよそにかはるとも侍る子とも

左歌ハ詞言よくしも侍るを右ハ中

心中しよりそふるもはくとみる侍る

しきにそ勝よ成しと今さつまりの侍りて

冬草ともあるらそてうくて又中なかれ

てとふるやうよせ中面く侍らんとりんとん

待まても勝と定侍りにけり

十七番

左　勝　　宗忠

かゝはりの海の影はさゝ波さえて神よ見えてハ分る也

右　　有家朝臣

志らしそ家よ今ハ風すみけてハけしきかれけれ

左さえても人よみえて寄るまじくハまさる

に勝に侍りけり

十八番

左　勝　　親定

うちわたす蘆の葉ならくハ流れゆく波よそに秋をまつ下

右　　権中納言

冬の夜ハ心く磨ける稲葉をしもまもる白露ぞ

左歌蘆の葉なすらくハ心をはせて侍る情

にいたらむのとも侍るを右哥情其法師

の哥なれハおもしく侍るとみえ侍るにて

え侍ることあれはすゝにすこやかなるそ右の

風に成侍しに侍る

十九番

左　勝　　前大僧正

淀よ千鳥なくなる汐風にしほひのかたそさむき

右　　家隆朝臣

惡しともなき夜のまし白雲は浪にしほしほてよ

左歌しほひの方そたかしくおほしく

しるし侍るを右はもろこしの白雲と

いへるは宜侍とも聞ゆる句をも志みてよろしからす

歴事や侍らんとて左の勝によろしかるへし

二十番

左　勝　　俊成卿女

かなしさの宿の月にさえつれしほの浪にまたれしをかれし佳

右　　定家朝臣

床の霜枕の露のさけ侍れはなを人のしのふよ

左歌情深宜侍へし右のことも床の霜ま

くらの露と侍るもいかにそしられとはいひてま

侍るは何事やらんまた左はまさるへくや勝る

侍るへし

廿一番　暁恋

左　勝　　家隆朝臣

忘すまてはかなく待つる夜の空の嵐にまた残る月

右　　雅経

海さへ鴫乃たつさはへの雲霧にまかれ暁の光
左ハ内ハれ心深くたつれハそふる情深くや
右鴫の羽かきしるもへてふれの霧にこ
ぬ秋ハ我を数かくといふうたふをおもふる侍るにハ
侍るを左方のかしこまりハあり明の月持ちなるに
やゝ勝るへし

廿二番

左　勝　　親定

白露乃おきそめけむさ別れて逢ふをそかこつ有明の月

右　　定家朝臣

ゑんをおいて別し袖の露にうつる月よあり明の光
左の歌そかこつ有明の月右方ハうつる月
よろしき歌のやうにみてかくその事にハ侍れとも
句をおもふに侍るに劣れ右ねこそいひ
むしろに長月乃ころハいさゝか
とえことハいふによりてきこゆれ
左の露乃おきそめけんしきをおもはゝ勝
よきことに侍るらむ左為勝

廿三番

左　勝　　前大僧正

忘れめや衣〻にハその袖の露に月さへやとりける哉

右　　　　　　俊成卿女

おしむらん別しもねしよなよなに情のかけて

以左哥詞宜侍と右衣を本として此袖の露

にやどりて月さへやとりける哉の心もこもれるに下句

絶はもてハやされ侍る仍可勝也

二十四番

左　　　　　　家隆

いつかハ風やたえぬらん人の世にさへかゝる庭の秋露

右　勝　　　　定家朝臣

おく露の絶ずもむすふ別にて涙そこくみゆる衣哉

左歌の心ハ優に侍るとかれ人といふや近頃

人とて侍りけるを見まそまされたかうや

ときこえ侍ると右歌宜や侍らんとおもひしを

露にそれる月たれやいそ心侍りとと

紙意匠そ此右歌も月ハ侍ねかりとや侍

しりハ識よりこそ侍らんと思ひ給て勝とかり侍也

二十五番

左　勝　　　　左大臣

とりのねとゝもに白玉とハそむかめのしらぬかの袖の露

右　　　　　　　　　　　　　　　権中納言

あくるまで行ゝへもみえぬ道にまよふらむこゝろは夢のうちの
左歌の志もむねもいひてこそいふなるゆめをもきゝ
ねぬることといふかひなく侍るを末の句たしかならす
くよ侍へし仍左の勝に付て侍るなり

二十六番　鶯恋

左　勝　　　　　　　　　観空

ゆふせみの衣のすその袖の露に月やとしての侍鶯

右　　　　　　　　　　　定家朝臣

みやこ出まちたちやさしさ雲のうへをもさそふ中にもなく鶯の声

左哥あさ衣のすその袖の露といふ月をま
まちゆふくれのそらといひたしくおもしろく侍て
左の勝とそ侍らし

二十七番

左　　　　　　　　　　　家隆

いつくともしらぬゆふへのけふのそらをは侍るかくて夕鶯の声

右　勝　　　　　　　　　雅経

あさかくそつらし方の端にそゆくへしらぬ方のゆふへの夕暮

両方の夕鶯の心情深くてよく宜しく侍れ
侍とはいひそといひゆふけむこそといふかな

いさゝかれむの海ちりに見て侍りけるにや右は
勝に侍らなり侍るにこそ侍れ

廿八番

左　勝　右大臣

何ゆへて思ひを入わひ人に侍りけり物ともしらぬの月

右　前大僧正

いかにせん侍へしとて思ひて言葉を打志られて

左歌侍へし也と山乃は月にいてと右は言
侍へしとこそよろしいとそこにいて言葉を
まいつくの文字はけきことをいとしく侍と左也

みく比月影を海さかに成侍りけり

廿九番

左　持　俊成卿女

身すさましむ人なき庭は苔深乃露をもはらふ秋風

右　家隆朝臣

荻の葉もまれし秋風の吹にけり計そ秋の成けん

左人なき庭の言葉といひ深乃露をもはらふ
秋風とは侍もとたくみてけるそ秋乃成けるとい
つゝ文艶に侍とは持にてこそ定め侍る

三十番

左　　権中納言
萩の葉に風のそよくも夕暮や〳〵と迷ひし思ひそめけん

右　勝　　家隆朝臣
おもふにはわかれし夜の寝覚にも聞えそめつるそのゝ松風

萩乃葉に風のそよくとおもひ〳〵と恋しきにお
もい詞なんとこそやさしきは聞え侍れ
右もそこの松風には天性そなはる心〳〵籠
りてこそをかしくなりて一首の歌はたしかに
やさしく侍れは勝に成侍り

三十一番　露中恋

左　　定家朝臣
思ひねの木葉もつらし梢まてしのひもあへす露こほれつゝ

右　勝　　家隆朝臣
忘れぬるやしらるゝね野中にかり枕まてしほるゝは秋の松風共夢

左歌木葉もつらし梢とも云心深し
色あつくも作れるを太まつもかりの松風の
詞とも云とかんなるやとて勝に侍るし

三十二番

左　　有家朝臣
ほしわひやひとりねはしせめて恋ね わかみまつとまて

右　勝　　雅経

草枕むすびしいさゝめかなたえ[illegible]あらしの夢乃通路

左ハむすびし野やとゝいふ事をよせて[illegible]心をこめたるやうにそきこえ侍るをとハ見えゆかり太ふの荒野の風のかよひちといひつる優にやとおもはるゝよし申さ[illegible]侍るをたゝあらそひてやみ侍るにや右勝なるへし中納言申しなるへし

三十三番

左　勝　　親定

思ひしみかはやすらん袖のつゆのつゝむ月かけにこそよそまよひて

右　　右大臣

うつしをくてらさの露に袖をかけし[illegible]

左歌のさゆる月にうそふかへてといふ情深く源氏物語乃花ちるさとのみをおもひいてゝつゝしく見え侍り右ハうつしをくてらさ[illegible]ことに侍らすハしらすむしゃ侍るか

やゝ左勝にや侍へし

三十四番

左　勝　　権中納言

またもこゝろ家路よくつらんなさたなうるゝとしゐてなさとて

右　　俊成卿女

忘じな契むすびし枕さへわれをは心よそにてふさ

左歌中の句ハ宜しうるに侍り右ハ心えきこしれ
契むすひし枕さへといへる作侍るハ作りやた
かきたるにとこそ見えて侍るいつれかまさるへくやう
よ侍るや左の勝とこそ申侍るや

卅五番

左　　勝　　前大僧正

葛城や秋とうつろふ袖の上に露をはらへてかねて山越

右　　宮内卿

かりねせん袖をもいつて見へさらに侍りけれ山里の

左の歌はの山田侍りて左ハ袖の色まて習
ひのやうに見えて侍り右ハ色侍るに左し
うはれことえといふてうる事なれやと
て左乃勝とす

卅六番　　山家恋

左　　持　　俊成卿女

人とはぬ深山に住し山里の月よりほかの風の音

右　　家隆朝臣

忘られて人のはてなるよりもまさるらん
右はまつこの山里にといふらんのかきり
左歌も人をといふはつらさをいふらんやと
まさりていひおほせてまきこえ侍るやと
て左勝と成侍りなんや

卅七番
左　勝　左大臣
山賤乃あさのさ衣をさをあらみあはて月日や杉ふける庵
右　定家朝臣
風ふけはきしのあら波松をうし悲せん人ハ袖よそとめ

左ハあはて月日やすきふける庵といへれは
見所ありて侍れは勝と侍るや

卅八番
左　勝　親定
かくとさへ思ひやらてそ杉の庵にまつらんことゝ松風そ吹
右　定家朝臣
おもひ侘てさもあらぬ宿の庵にさへしく雲やかゝるらん
左歌杉乃庵に松をまつらんといひて松風を吹あはせ
しハやさしく侍るを右もさしてしく雲の行衛
姿もよくきこゆれは左為勝

三十九番

左　勝　前大僧正

山ふかみ山ある菴のみゝさらと我袖をあらしふく濱

右　雅経

君すむや都をよそに宿たえてましぬるはみな旅にて

あま山ある菴のみゝさらと我ならす袖

深おもしくまゆるとて君すむやとゝけるハ

とらいへく勝にや

四十番

左　持　権中納言

ひとりすまや板まの風そこほる淡れ枚そくてんにや

右　宮内卿

物おもふ人ハ旅ならね山里に秋かせならは松風やきこゆれ

左右やうりハ山里にまさりてや右歌の末句

去年百首中にまさる旅路をみすへつく

持なり

四十一番

左　勝　右卿惣

親定

里ハあれぬ尾上の宮のおのつから待しよゐも虫のこゑ

右　左大臣

すゑまでと契てこそは高砂にゆくらん松風ぞ吹
左歌をのへはまつとのつゞきよろしく
見えく侍り右乃末の句至りは見えて侍れど猶左を勝とす

四十二番

左　持　有家朝臣

かゝる人の心にまつの色ぞ種て庭も籬も野への秋の露

右　家隆朝臣

行く浪や志賀の浦風吹くるさへ袖にすゞしき
左右かゝる人乃心をいさゝかもしらへて左歌
も志賀の古ゝろも袖かゝりぬる人もいとゞ可為持

四十三番

左　持　前大僧正

冬の夜の袖の河風はかく里のゆふ暮秋乃色かな

右　俊成卿女

ときはなる木のすゑの里に秋風の夕暮ごとは人つまとまも
左歌夕暮の里は秋乃田面なくしたしきる
ものとけりやさしくやすらかに猶勝
ものゝはかなしくさへゆゑにて為持や

四十四番

左　権中納言

籬には鹿そなれたるあらしてやまの秋をもしるらむ（?）

右　勝　定圓（?）

ちかりしをわか成ゆく西をよゝしらするあき（?）

左まうちきみは鹿そなれたるとよゐ（?）

そハ待されたるまへの句のことよりやうけん（?）

右のうしなひていひたりといひてなり（?）

事なく待まさハ勝負しそれ侍るを（?）

四十五番

左　持　定家朝臣

法の道みこころはせまつさまはまことのあはれ右への（?）

右　雅経

人のみ波里をかけていさよへ秋月の（?）

左まうしてせしまれうのばかりしく侍（?）

へきなるべきて侍れはかねてのきて（?）

よいつゝやんごすりけり右里ををいて（?）

そかもしのやうさやうはみて侍まし思（?）

老ならくの侍りは持とすへくや。

四十六番

旅泊戀（?）

左　持　俊成の女（?）

[illegible]

右　家隆

いつはりのそのおもかけのねかねにも涙して月そかはれる

たか歌にかそおもひしそこしへもうくやと

きこえ侍しを左の歌なほいうにまさりて

負とられて侍るは猶まさりてこそみえ侍らんと申

四十七番

左　持　権中納言

ちきりしや風の使にむすひても袖の涙のつらき枕を

右　定家朝臣

忘まし涙乃月によるまても浦かとうし窓にあふ舟人

左の枕をしきてそむすひてそ又むすひしと末句

窓をたまきても侍れはそ又ねにつゝく葉

しなるへし

四十八番

左　勝　親定

おもふ人今こそのはなかくにみちてけふこそ袖によはりゆく秋

右　定家朝臣

なかめしの花の夜によはりそこふにかはしれのちの秋

左此歌すゝいふしも川こしきはりまさりて宜く

こえかへて秋をみえしなかれてまかりいはぬ歌

ゆるしおかく侍る右を為勝

四十九番

左　　　前大僧正

身をしるゝ雨につけても磯の松風のおとさへあはれなるかな

右　勝　　家隆朝臣

うき枕なみにぬれつゝ袖の上に月をかけゝる秋

左の歌の心面白きよし又かつは人も心あるしく侍

侍と右の歌よろしくしてこそ月をかけゝる

可為勝よし申侍り

五十番

左　勝　　左大臣

まそてにも露そ夜ふかき磯のうら松の浪の秋の夕暮

右　　　雅経

かゝる袖をぬらしの秋ひかりの物をいふやうなる月のや

左右共面白くはべるを宜きよし侍と左の歌を

句うちそへ身やをかしからむとて侍

左ふしをかけたるを右の持たる左右の侍るなむ

可為勝なり

五十一番　関路恋

左　勝　　前大僧正

白露やひかり袂の月数へて流せともへそ行しきぬ

右　　　　　　　権中納言

いそいくれ末の関守もうちぬるを見く

左歌ごとくなくて侍り右哥いそいそ

きしみつしきやうには侍るを何はすれ

左勝よろしく侍るをなとまさるへし

五十二番

左　　持　　家隆朝臣

忘らるゝ袖をもすけ清見か関ぞ名にたつ浪のあけ

右　　　　　雅経

見ても人の面影に清見かた神は守りて浪の通路

左右共に清見潟をよみて侍る貴様に侍る

たかひをもすけいかにそきこえ侍るに

浪のかよひちはなをこゝろさらへくやと侍

持とつき侍るよし

五十三番

左　　勝　　俊成卿女

あは坂の関の月影よるまれ秋をも昔にしのそ

右　　　　　通具

名をきてつくしやいつを限りの関人の心の夜の霞

両首共に須磨乃関にてかよへは勝方侍るや
と見えて侍るを左の勝に付侍りにき右
何も右のもしはよろしく侍るへきそ侍るか

五十四番

左　勝　　左大臣

我恋やこの世と思ひてしのかはりに袖の色は濃き

右　　定家卿

花も人閑りしをとりは清見かた世をうきや袖の波乃月影

左歌この世と思ひてもしは月もなくしかるへく候

と左右ともに世をうきや袖乃うちにて又ハ宜侍るへし

上の句ははまりやうもや左も為勝

五十五番

左　勝　　親定

恋をのみ須磨乃関守まけてしも袖こそ浪ハ立かへりしと

右　　定家卿

須磨乃浦や浪にあらはるゝいて宮原にゆく風そ立つ

左歌を須磨乃関守に袖にて侍るか
清しく侍る左ハ関吹こゆる浪のよろしく侍
へきを風そふるこそあはれやとも侍らん
左定家よ艶に見えて侍るも可勝にや

五十六番　海邊戀

左　　　　　　　　　　　俊成卿女

契しを頼みしかひの杜鴫やさしまし浪の音計して

右　勝　　　　　　　　有家朝臣

杜鴫や寐せぬ海士の袖の上にこゝろもてこそかけれ浪は

両方の杜鴫なり左ハ頼みしかひつゝ心の侍
も侍つし右寐せぬあまの袖の上にこそとや侍
つらんとこそ見て侍れ右勝に侍にやとかく
よしとも侍るにこそ侍る也

五十七番

左　勝　　　　　　　　親定

ゆるさん思ひの末は貝なき法に浪にまかする袖（袖イ）

右　　　　　　　　　　　家隆

なれてこそ伊勢をの海士の前も見ん袖もかはかぬ
左の歌いかにもよろしくこそ侍れ右の歌も
浪にまかする袖にておかしく侍を右も又見えず
いづくにつけてもまさりてやと侍らん左もて一段侍ら

五十八番

左　勝　　　　　　　　左大臣

打忘れまどろむ夜はの須磨は宵にてさへ秋風吹まさる浦に帰(?)けれ

右　　　雅経

契りこそはやいつの末の松まつにくらへは浪は越つ

左歌まつよりくらふるは越けると云る類

は侍ると左方も浪はこえて侍るや初勝に

付侍るへし

五十九番

左　持　　前大僧正

なかなかにそれとかためのぬきもおかすへき涙の袖をまつや

右　　　定家朝臣

別れにし人のなこりの袖ぬきて人はみちなくいつるへ

左右ともによくきこえ勝劣なく侍るとそ持によ

ほとまうり侍しなるへし

六十番

左　　　権中納言

儀なるつゆ侍ものの人数袖をかへしひとみてくれすそ出つる

右　勝　　家隆朝臣

しかれしもひとまもあきもとりてはまこつても待てしたの浪色

左歌ひとりてんすて古今のうたのかへしそ

そくつしてまてかなりや太ここてはまて

よすうたの浪風の心勝と付侍へし

六十一番　河邊戀

左　勝　右大臣

てつせいぬてこす浪の岩のとよおもひわけても人をまた
かこ

右　定家朝臣

名取河こえぬハつらし頼めつる袖のみぬれし瀬々の埋木

左歌ハ初瀬河のそてこす浪乃萬葉集之
川て文艶なる歌とおもふ右の名取河瀬々の埋木
ことなりて聞へし左勝て侍らん

六十二番

左　勝　親定

我袖まて山川乃瀬よりもまさりもせよかくそ
かこさ

右　俊成卿女

わかれての後をなをそせきかけて流れわかれし白浪

左まて山川乃瀬よりもとこそなけれ
ことよそへて侍るめり字法に越えたる
うちなて待る右は水底深くしてあるをなる侍
也左も勝侍らし

六十三番

左　勝　家隆

あすか河昨日ハ淵とそなりにけりそらゆくやまの瀬にかはるらん

右　　雅経

はれぬ雨いかくもぬれて袖かさそや人の別をも
左歌はれぬ雨いかくもぬれて川もこそかしらしく
見え侍るを右のなみはたらきよ和やなくに詠ん
こゝにつきてはよろしく侍るへしむ勝とす

六十四番

左　勝　　権中納言

あふ坂のこゑもすへまけの所務は秋さへけぬ思せんさは

右　　宮内卿

千鳥なくはるゝ風の芦原風さえてあるとこそあそふ夕なみ

左歌みとすへまけの所務は川ことて御ゆ名と
こそかくて侍るを右歌さる句のそへは又けれてと
ろ又互侍りとはきはならうちて侍るよし
おもすおもや侍る左歌さへけれなゝ
勝とす侍るまたなき侍る

六十五番

左　勝　　前大僧正

ことしもかゝる名のつく浪の所中

右　　宮内卿

よしの川せきいれて

右歌字餘乃上下句にかれ〳〵あつまり侍り
みやまかせ龍田川なかれもこそ流に侍る
と持にやあり侍りなん

六十六番　寄雨恋

左　　　　権中納言

雨それハ我乃衣手にすくよ思ひてをりしはてなき

右　勝　　俊成卿女

かくよ〳〵時雨ハ袖にかけてひとへにこそとせぬは

左歌雨それとゝけかしり末句まて雨にく
せられてハゆへ侍り右の時雨ハ袖にかけて
かへり〳〵字作る艶にハ侍りや
とて為勝

六十七番

左　　　　有家朝臣

あまた雨も瀬となるまし〳〵にこそね庵にかゝるらん

右　勝　　定家朝臣

行末のことさへして瀬のまへにかゝる嵐の庵なる

左歌えこそね庵ハまた庵にや侍らん右の字ハ
さみたれの雨にもしる雨れ見えたりすへきハよる
しく侍へし勝乃字ほとこそ侍へし

六十八番

左　持　　　　　　親定

おりやそこらにみえしとふかれしは伴鳥の山の秋の夕暮

右　　　　　　　　雅経

みつ篠田の浪や雨になるらむしくれそふはまちの宮

左のうたそこそおもひけりまされる以情

右のうたもおもしろく見えて侍り左の方

この浪や雨ならむしくれそふ以艶には侍

とれ左の歌の中につれかのまさりて侍るらん

とかくて侍り勝の字一紙待り

六十九番

左　勝　　　　　　前大僧正

たまかねてかへらん雲やかゝるらむそての嵐の峰

右　　　　　　　　家隆

年つもるおもひはいかにふかき夜の寝覚のつらき雨もきこえて

左やかましくまさりてきこゆる右うたもおなしく年月の

かゝる情深かりしくしおもしろく見えて侍

里なとに湯人をえらひてさふらふ侍ば左歌の

うち勝の字むすふへきにや

七十番

左　勝　　左大臣

あくまて秋のよかの宿の月をとはぬもうらみつや

右　家隆朝臣

わすれてもおもやは袖のしぐれにやかて文みる人もとは

左右両首いつれもきこえてよしと左乃月を
とかめてはいやなれとはんとするも
をはりの句いと勝るへし

七十一番　寄風恋

左　勝　宮内卿

やかてやはうらみてかはる風をさへ秋をまつとすらむ

右　有家朝臣

おもひわびうきをのみこそおもひきれつつ秋の袖の上にまつはる

右方申されけるも袖乃秋風みな身にしみ給ふとそ申されけるに

なりたうこ侍とや心猶さる事なし

七十二番

左　権中納言

ひとりのみ秋風寒くかよふてよるへきかたもなし

右　勝　家隆朝臣

いかにせんわかれし袖をわすれて秋風の

左右も秋風よしとてうくかなる事あへし

ありしをも侍るは左歌のかはりけれは御めて
しといひて秋風を吹とある宜しく侍なち
くもせてうらし水侍るまて見えさるす
侍るりいふも右勝よ仰有し

七十三番

左　勝　親定

いつくにも同し浮世をおもはれてそつきし庭の松かせ

右　前大僧正

いまさらせんかたもやそむしよよ庭の松風のおとに吹かる

左右松風のをとにめなりとはいつれも宜しい

よろしく侍るに左歌病気によはきさま
そおりしもやをそ侍るとみえしひそくて侍
申し仍為勝

七十四番

左　左大臣

萩原やよはにあらしの秋風の物おもふ一夜は秋のつゆ

右　勝　俊成卿女

消えそむる露をとつれて下荻の末こす風の音につけても

左歌よはにきこゆる秋風とおひ物ゆく

是は秋のかりにいつれの詞も艶に

も猶ハ結と右まことに風ハことにまさま
とみえ侍らしく八侍へし是ハ猶叔也
中物語乃うちに八侍るをへしたゝと
子つゝこそ侍を縁乃字に侍るとも
愚老か両月にもえんつかへし

七十五番

左　勝　定家朝臣

白妙乃袖の別に露落て身にしむ色の秋風ぞ吹

右　雅経

いつはりの云ふ夜のねさめに露はてまたまつとしるへき松風の声

左歌身にしむ色の秋風を吹とよろしく
しらぬ波にハあはれさもへし右哥又ことに
しもおもふに杜風乃音も心にとまりてよ
おもしろへし仍勝に侍るへき